

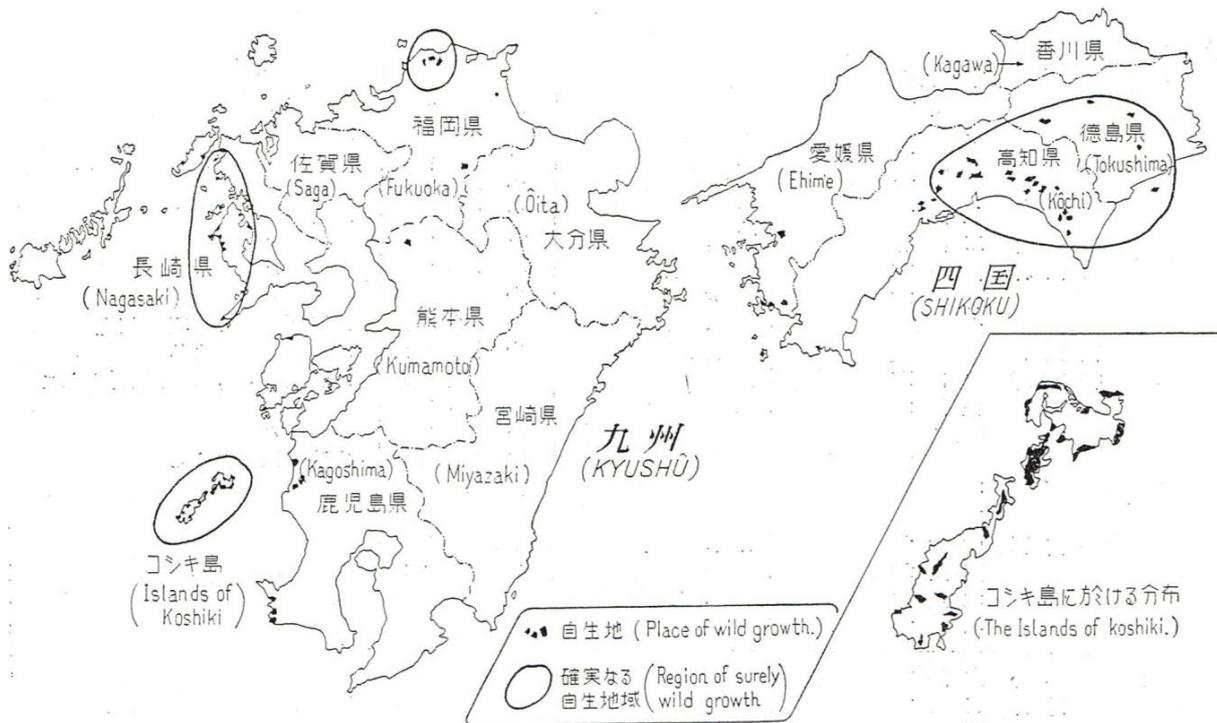
## 宗像市の花「カノコユリ」とは

日本に自生するユリは、15種類あります。そのひとつにカノコユリがありますが、これを漢字で書くと「鹿の子百合」となります。花びらの内側に、子鹿の背中柄に似た模様があることから名づけられました。

宗像市の花は「カノコユリ」、これは昭和56年に決められました。昭和56年2月に市の樹・市の花の公募が行われ、市の花は136点の応募の中から選考委員会の協議を経てカノコユリに決められ、4月から施行されました。

カノコユリが選ばれた背景として、宗像市は全国でも珍しいカノコユリの自生地であることが、決定の大きな要因となったようです。

カノコユリは、九州（福岡県・長崎県・鹿児島県）と四国（徳島県・高知県）のごく限られた地域にのみ自生する希少な植物で、今では絶滅が危惧される絶滅危惧種に指定されています。



第1図 本邦におけるカノコユリの自生分布  
Distribution of wild plants of *Lilium speciosum* in Japan.

資料：九州農業試験場園芸部のカノコユリ現地調査（1953年）報告書

市の花に指定された当時もすでに、自生のカノコユリは急速に減少してきており、宗像で確保し流通できる球根は全くありませんでした。このため、県外（鹿児島県等）から4000球の球根が導入され、市民に配られた経緯があります。しかし、その大部分はカノコユリに適した場所に植えられていないこともあって枯死し消失して、市民が目にする機会は限られています。

カノコユリが減少した要因は人の活動と関係が大きく、人里の開発や農業の機械化に伴う自然環境の変化によって、カノコユリの好適な環境が維持できなくなってきたことです。

## 宗像市固有のカノコユリ

平成22・23年に九州大学と宗像市等により宗像市におけるカノコユリの実態調査が行われました。採集されカノコユリの葉を九州大学でDNA検査された結果、多くは他県由来のカノコユリでしたが、数か所のカノコユリのDNAが宗像市由来のものであることが判明しました。

この宗像由来のカノコユリを宗像固有種と呼ぶこととし、宗像市とむなかた水と緑の会では固有種の保存、増殖及び普及を図る活動を始めました。



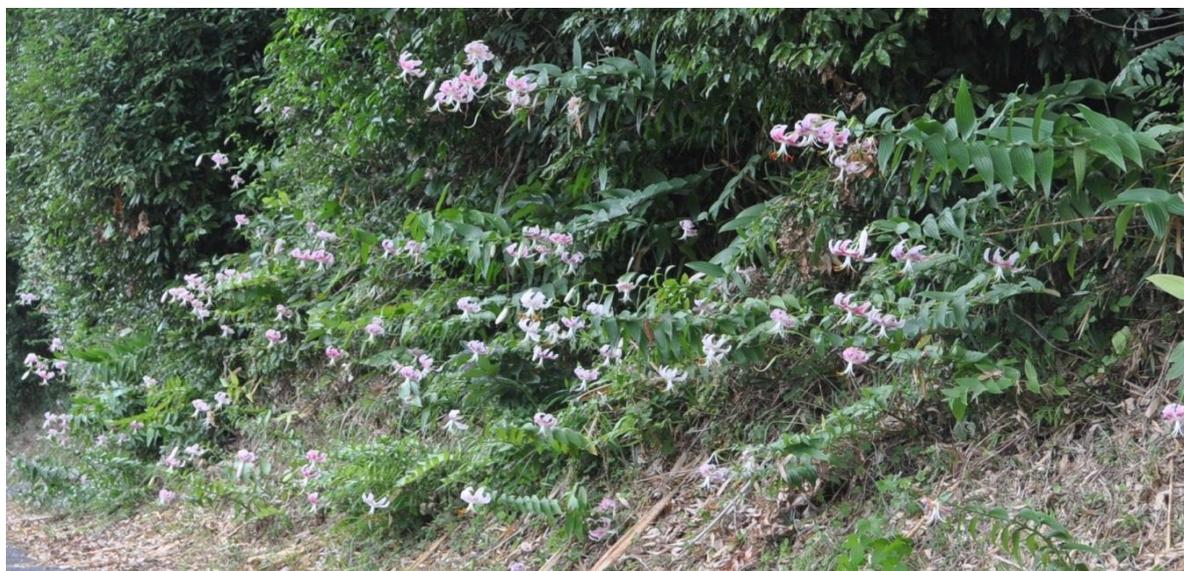
### カノコユリの好適環境

カノコユリは、生育環境をすごく選びます。適した環境では自然増殖して広がっていきますが、適さない環境下では直ぐに絶えてなります。

カノコユリが自生し繁殖しているところの環境を見ると次の通りです。

- ① 東向きの斜面で、上部に雑木が茂り、西日や真上からの太陽光をさえっている。
- ② 粘土分の多い土壌で水持ちが良いが、傾斜地で排水が良いところ。
- ③ 家の裏側の斜面や、農道等の横の傾斜地で、時々草刈が行われている。
- ④ ツツジ等の小灌木や1 m以下位の雑草が生え、地際に直射光線が当たらないところ

好適環境の土地に植え、関心を持ち、草刈りや日照調節など、ほんの少し人が手を加えれば、自生地が広がってゆきます。カノコユリの花が咲く里づくりのためには、カノコユリに対する正確な知識と維持しようとする意志を持った人の手助けが必要です。



人里の道路の横に咲くカノコユリの群生。草刈りなど人の手が入って維持されている